

鉄鉢と魚籃と

——其中日記から——

種田山頭火

青空文庫

九月三日。

曇、さすがに厄日前後らしい天候。

朝は梅茶三杯ですます。身心を浄化するには何よりもこれがよろしい。

前栽の萩——それは一昨年黎々火君と共に裏山から移植したもの——が勢よく伸びて、びっしり蕾をつけている。早いのはほっほっ咲きだしている。萩は何となく好きな花だが、それは山萩にかぎる。葉にも花にも枝ぶりにも私たち日本人を惹きつけるものがある。

このごろの蚊のするどさ、そして蠅のかなさ、いずれも死んでゆくものすがたである。

午前は郵便を待ちつつ読書。

ハガキ三枚、黎々火君から、十返花君から、そして珍らしくも病秋兔死君から。雄郎和尚から絵葉書と詩歌八月号清臨句集黎明、これは若狭紙を大判のまま使って、なかなか凝ったものである。

午後は近在行乞、家から家へ歩きまわっているうちに、何だか左胸部が痛むようなので、二時間ばかりで切りあげた。それでも米八合あまり頂戴している。さっそく炊いて食べる。

まことに「一鉢千家飯」、涙ぐましくなる。

今日之行乞相はよかつたと思う。行乞の功德はいろいろあるが、行乞していると、自分のことも他人のこともよく解る、我儘がいえなくなる。我儘を許さなくなる。我儘をたたきつぶして、自他本然の真実心を発露せずにはいられなくなる。

九月四日。

宵からぐつすり寝たので早くから眼が覚めて、夜の明けるのが待ち遠しかった。

芋の葉を机上の日田徳利に挿す。其中庵にはふさわしい生花である。

小雨がふりだした。大根を播く。托鉢はやめにして読書に倦けば雑草を觀賞する。

夕方、K君がひよっこり来庵、明日から出張する途次を立ち寄ってくれたという。渋茶をすすりながら清談しばらく、それからいつしよにF屋まで出かける。ほどよく飲んで酔うて戻って来たのは十二時近かつたろう。

九月五日。

雨、だんだん晴れる。

今日は澄太君が来てくれる日だ。

待つ身はつらいな、立ったり坐ったりそこらまで出て見たり——正午のサイレンが鳴つてから、やっと懐かしい姿が現われた、Iさんといっしょに。

酒、米、醤油、酢、豆腐、茄子、何から何まで御持参だ。これではどちらがお客だか解らない。客も主人もなくなつたところに私たちのまじわりがある。

名残はつきないけれど、六時の汽車へ見送る。人生はすべて一期一会のこころだ。

さて、明日は托鉢しようか、魚釣しようか、もし其中庵にスローガンがあるとすれば——

「今日は托鉢、明日は魚釣！」

(「層雲」昭和十年十月号)

青空文庫情報

底本：「山頭火随筆集」講談社文芸文庫、講談社

2002（平成14）年7月10日第1刷発行

2007（平成19）年2月5日第9刷発行

初出：「層雲 昭和十年十月号」

1935（昭和10）年10月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2008年5月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鉄鉢と魚籃と

——其中日記から——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 種田山頭火

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>